



Title	Innocent Empire: Robinsonade and Modernism in the Edwardian Age
Author(s)	高田, 英和
Citation	
Issue Date	2013-10-31
Type	Thesis or Dissertation
Text Version	ETD
URL	http://doi.org/10.15057/25938
Right	

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 高田 英和

論文題目 Innocent Empire:
Robinsonade and Modernism in the Edwardian Age

論文審査委員 三浦 玲一教授、大田 信良教授、中山 徹准教授

1. 本論文の構成

Introduction

Robinsonade, Modernism, and Imperialism

Chapter 1

Empire and New Liberalism:

Anti-Bildungsroman of D. H. Lawrence and J. M. Barrie

Chapter 2

Who Was Wendy?:

Girlhood/Womanhood and Social-Imperialism

Chapter 3

Between Martin Pargiter and Peter Pan:

Empire and Innocence

Chapter 4

(Im)possibility of *Peter Pan* of Boy's Adventure Story:

New Liberalist Imperialism and the Emergence of Modernism

Conclusion

The Modernized Robinsonade, and Imperialism without Colonies or with
Neverland

Works Cited

2. 本論文の概要

本論文は、J・M・バリの『ピーター・パン』を中心に、英国エドワード朝期（1901-1914）のロビンソネイドとモダニズムの系譜を分析し、反帝国主義批評の新しい道筋の提示を目指したものである。

序章で辿られるように、『ピーター・パン』は、これまでロビンソネイドの頂点として整理されることが多かった。ロビンソネイドとは、ダニエル・デフォー一七一九年の『ロビンソン漂流記』以来の、孤島におかれた主人公の冒険譚の系譜を指すが、マーティン・グリーン等は、ロビンソネイドは、同時代の帝国主義を正当化し伝播するための教具として流行したのだと指摘し、同時に、植民地の拡張が現実には不可能になる世紀転換期以降になると、ロビンソネイドは、『ピーター・パン』がそうであるように、ファンタジーに姿を変え、帝国主義の不可能性を症候的に表現するのだとした。本論文の主張は、グリーンの述べるような「帝国主義の不可能性」はいささか正確さに欠ける表現であり、そこに、ファンタジーを通して表象される、帝国主義の新しいかたちを批評的に見るべきだというものである。

本論は、一般に児童文学の黄金期の作品とされる『ピーター・パン』が示すこのファンタジー性を、イギリス文学におけるモダニズムの問題との関連において考察する。フレドリック・ジェイムソンは「モダニズムと帝国主義」において、E・M・フォスター一九一〇年の『ハワーズ・エンド』を例にしながら、およそ一八八五年以降現れる資本主義の最終段階としての帝国主義において、宗主国と植民地とのあいだの有機的な関係の表象が不可能になり、この植民地表象の不可能性を症候的に表現しようという試みが、リアリズムを脱したモダニズムの詩学の誕生を必然としたのだと論じる。本論文は、グリーン等の議論に、ジェイムソンの議論を接続しながら、エドワード朝期における帝国主義の姿が、『ピーター・パン』のようなテキストにどのように反映しているかを分析する。

第1章は、D・H・ロレンスがこの時期にバリの作品を知人に強く薦める書簡を書いていることを出発点に、彼の代表作のひとつ『むすこ・こいびと』が、教養小説の枠組みを使いながら、裏返った反成長小説であることの意味を分析する。それは、『むすこ・こいびと』の主人公が、ピーター・パンと同じ（ある

いはそれをモデルとした) イノセントで成長をしない永遠の少年として構想されているということである。ここで、バリとロレンスが同じような男性像を理想とするのは——すでに研究されているように、十九世紀の成長概念が帝国主義的な拡張概念とコインの裏表の関係にあるのに対し——これまでの拡張型・植民地型帝国主義が、この時期、右派・左派の両方から批判されるようになってきており、大英帝国の方針が、拡張主義から帝国の維持へと緩やかに変容していったことを反映していると論じる。

第2章は、『ピーター・パン』の主要登場人物の一人ウェンディの女性性を分析する。一般的にこの時期の女性像は、旧来の「家庭の天使」と解放された「新しい女」の二項対立から整理されることが多いが、ピーター・パンの母になることを求め家事労働に従事しながら、空を飛んでネヴァーランドに同行し、戦闘にも参加するウェンディは、この二項対立を破綻させている。しかし、「主体化された家庭の天使」とでも言うべきこの姿が、帝国の維持へと方針を転換しようとしていた大英帝国の方針を正確に反映していると本論は指摘する。当時の資料に丹念にあたりながら、本稿は、実際そのような女性像が、植民による帝国の実質的な維持を重視する当時の帝国主義言説において称揚されていることを証明した。

「一九一〇年十二月、または、その辺りで、人間性は変化した」とはヴァージニア・ウルフの有名な一節だが、第3章は、この一節を説明しようという意欲的な試みである。ウルフ晩年期の小説『歲月』を採り扱いながら、この小説のなかに、エドワード朝期における、①植民地主義から金融資本主義的な帝国主義への帝国主義の性質の変化、②植民主義的な帝国主義を批判するニュー・リベラリズムの誕生が記述されてあるとし、③それが、ピーター・パンと同じように、成長を嫌悪する主人公マーティン・バージターを産み、④ロレンスの『むすこ・こいびと』やウルフの『歲月』のような作品、同時代ほかにも見られる、反成長や退屈を主題とした作品と『ピーター・パン』との共通性は、これらがみな同じ帝国主義の言説下で生産された、ひとつの傾向を共有する作品群であるとする。逆に言えば、この①から④に列記されるような特徴こそが、英国モダニズムの特徴の本質であり、それはエドワード朝期に起こったものであると、本論は主張する。

第5章は『ピーター・パン』における男性性についてである。ピーターの配下の少年たちがフットボールに興じることと、同時代に、フーリガンの問題、

不良化する少年たちをどのように管理するかは大きな問題であったことに着目しながら、帝国の維持が問題となるエドワード朝期において、植民地の問題はすでに大英帝国内部の治安維持の問題と鏡像関係にあったことを指摘する。この鏡像関係と、2章で指摘した新しい女性像は、ともに、帝国の維持期における、植民地と宗主国とのあいだの新しい連続性を含意している。これら関係が、モダニズム誕生の原因としての、ジェイムソンの指摘する植民地表象の不可能性の背景にあるのではないかと指摘しつつ、4章までの議論でまとめられたモダニズム論を、ジェイムソンの議論をすり合せ、統一したのが5章の議論である。

結論では、ハリー・マグドフの「植民地なき帝国主義」の議論を紹介する。これは、二〇世紀の合衆国中心の帝国主義のあり方についての批判的な議論であり、現在のグローバル状況をどのような帝国主義状況として考えるかについての議論である。本論が指摘した、エドワード朝期から始まる新しい帝国主義の状況——植民地主義的帝国主義のニュー・リベラリズムによる批判を踏まえて成立する、維持される帝国——が、マグドフの言う植民地なき帝国主義のある種の準備段階と考えられるものであり、本論が確認した『ピーター・パン』を中心としてエドワード朝期の諸作品は、そのことを記述しているのだと、最終的に、議論はまとめられる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の第一の成果は、これまで児童文学研究とされてきたマーティン・グリーンの議論や児童文学とされることの多かった『ピーター・パン』を、フレドリック・ジェイムソンらの研究と接続し、新しい視点からの研究を開始したことにある。これによって、いわゆる児童文学の黄金期が、モダニズムの問題と重要な関連をもっていることが示されたことは、大きな意義を持っているだろう。これはまた、本論全体の細部についても言えることで、児童文学研究といわゆるモダニズム研究の双方からの先行研究が参照され、二つの研究ジャンルを統合した研究を目指そうという強い意欲が感じられる。

次に、ロビンソネイドを不可能にする歴史的条件についてのグリーン議論とモダニズム文学の発生を可能にする歴史的条件についてのジェイムソンの議論を「帝国主義」という概念を通じて相互補完的に接続したこと。これは、帝国主義論の文化表象についての新しい仮説の提示であり、重要な示唆を伴って

いる。

この視点が重要なのは、さらに、本論の観点が、植民地主義型帝国主義とは異なる現代のグローバルな金融資本型帝国主義への対応という問題意識を有しているからである。言い換えれば、一九九〇年代の文学・文化研究であった新歴史主義・ポストコロニアリズム論、たとえば、ジェンダーや人種の言説・表象に注目するアイデンティティ主義や文化政治学による反植民地主義が、必ずしも、帝国主義批判にはならないということ、むしろ、帝国主義とその様々イデオロギー（性・結婚、ライフスタイル、産業・雇用・職業など）の変容という歴史的コンテクストにそれらの言説や表象を位置付けなければならないということを、本論は明確に論証したと言えるだろう。

また、より具体的には、とりわけ2章と5章において、筆者が自身で独自に発見した歴史資料を題材として、正確で説得力のある議論を展開したことは、今後の『ピーター・パン』研究のみならず、モダニズム研究一般にとって、重要な成果と言って良いであろう。

対して、本論の問題点としては、第一に、各章が独立して書かれた論文を出発点としているための、いささか論点の繰り返しが見られること、また、全体に、議論の整理が十分に明晰とは思われない箇所が散見されることがまず言えよう。

次に、ジェイムソンのモダニズム論の根底にある空間の詩学やスタイルの誕生についての議論が本論ではほとんど見られず、実際のところ、ジェイムソンが言うような意味で『ピーター・パン』がモダニスト的作品であると言えるのかどうかという問いが、答えられていないことは、本論の議論の不完全な点であるとも考えられよう。ジェイムソンが帝国主義とモダニズムを関連づけ、『ピーター・パン』は帝国主義と関連しており、ジェイムソンが言うようなモダニズムの諸特徴と近似したものが『ピーター・パン』に発見されることは、本論の述べる通りである。しかし、ジェイムソンが言うモダニズムとは、全体性への意志と関連したより複雑な概念である。このレベルの議論が本論では無視されている。

同様に、*「一九一〇年十二月、または、その辺りで、人間性は変化した」*というヴァージニア・ウルフの言葉について、本論は本論なりロジックにおいてこの有名な一節を解説しているが、この一節の解釈についてはこれまでいくつもの重要な論考がある。そのなかには、この一節をむしろエドワード朝文学

の批判として読むものもあるわけだが、本論の議論がいかに説得力をもっているとも、それら先行研究が十分に踏まえていないことは残念である。

4. 結論

以上のような議論すべき点はあるものの、審査結果にかんがみ、審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果報告

2013年8月3日

受験者 高田英和
最終試験委員 三浦玲一 大田信良 中山徹

2013年7月31日、学位申請論文提出者 高田英和氏の論文および関連分野につき、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文“**Innocent Empire: Robinsonade and Modernism in the Edwardian Age**”に関する疑問点および関連分野について質疑を行い、説明をもとめたのに対して、高田英和氏はいずれも適切な説明を以て答えた。

よって審査員一同は、高田英和氏が学位「博士（学術）」を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。